

～週刊オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画Ⅱ～

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 81

《悪魔のロベール》

会期／2020年9月8日(火)～11月8日(日)

(※休館日はwebでご確認ください)

連載／岸純信(オペラ研究家)

協力／渡辺真弓(オン★ステージ新聞編集長/舞踊評論家)

企画・構成／関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

現在、「週刊オン★ステージ新聞」(青林堂)にて連載中の「バレエとオペラ」関連企画として、常設展をシリーズ開催いたします。執筆者でオペラ研究家の岸純信氏は、兵庫県立芸術文化センターでも、幾度も講演などを行われています。

本展では、「薄井憲二バレエ・コレクション」から図版提供した記事と共に、実際の資料をご覧ください。第二弾は《悪魔のロベール》(2020年5月22日号「バレエとオペラ」第3回)より。記事では、かつて薄井氏と岸氏が交わされた書簡についても語られています。どうぞお楽しみください。

-----「バレエとオペラ」第3回 岸純信 ----- バレエが後押ししたマイヤーベーア《悪魔のロベール》

「バレエ界にオペラをもう少し知って頂かないと！」——筆者にそう痛感させた一作がマイヤーベーアの《悪魔のロベール》(1831)である。この発端は一通の書簡から。

「面識も無いのにお訊ねして申し訳ない。《悪魔のロベール》の第3幕は全部バレエだと聞きましたが、本当でしょうか？」封筒の裏には「薄井憲二」とあった。

怒髪天を衝くとはこのことか。憤激の余り、速攻で返事した「先生にそんな嘘を吹き込んだのは誰でしょう？」。

その幕は1時間かかるが、舞踊主体の場面は約20分。オペラ座での世界初演時に大評判になった〈死んだ尼僧たちの踊り〉(かのマリー・タリオーニも参加)に続いて、悪魔(主人公の実父)率いる合唱とダンサーが激しく絡み、集団ヒステリー状態で締め括られる。この場面については、観劇したショパンが故郷の父に絶賛の手紙を送った話も有名である。「新しいものを観た！」という興奮にピアノの詩人も揺さぶられたのだ。

台本の作者は19世紀フランス劇場界で最大の成功者たるスクリーブ。カトリック権力に反発する彼は、ゾンビと化した尼さん一同が妖しく踊るという場面を抑圧的に設け、それ

がマイヤーベーアの奇抜な音作りにピッタリと合い、時代に著しい影響を及ぼす傑作が生まれたのである。

ちなみに、《ロベール》は第二次大戦後に上演が急減した。B級ホラー的な物語が時代遅れになったらしい。しかし、1985年にオペラ座が蘇演して復活し、ROHでの2012年の公演が日本語字幕付きでDVD化された。(中略)先述の狂騒シーン(振付はリオネル・オッシュ)の禍々しくも壮麗なさまなど、ぜひご覧頂きたいものである。(後略)

出展資料

- ◆AP-193 アンティークプリント/《悪魔のロベール》/1851年頃
- ◆BK-1135 pie 書籍/『悪魔のロベール～尼僧のバレエ～』/アン・ハッチンソン・ゲスト&クヌート・アルネ・ジュルゲンセン/ゴードン&ブリーチ出版/オランダ/1997年



参考映像

- ◆英国ロイヤル・オペラ・ハウス (ROH)
《悪魔のロベール》2012 第4幕 フィナーレ
Meyerbeer: ROBERT LE DIABLE (ROH)
<https://youtu.be/VGOJ7QexcOA>

- ◆英国ロイヤル・オペラ・ハウス (ROH)
《悪魔のロベール》2012 〈死んだ尼僧たちの踊り〉
Robert le Diable | Ballet of the Nuns scene clip
<https://youtu.be/Fwehe3L6D1g>



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用